

「仏とはハタラキ」

中国宋代の詩人、^{たいえき}載益という人の作った「探春」という詩を紹介します。

【本文】

盡日尋春不見春 杖藜踏破幾重雲
帰来試把梅梢看 春在枝頭已十分

【読み方】

盡日春を尋ねて春を見ず
^{じょうれい}杖藜踏み破る幾重の雲
帰り来りて試みに梅梢を把^とって看れば
春は枝頭に在りて已に十分

詩の内容はおおよそ次のようなものです。

みんな「春が来た、春が来た」と言うが、その春とは一体どんなものか、私も一日中、野山を歩き回って探してみたがついに見つけることが出来なかった。

意気消沈して家に帰り、庭先の梅の枝を見てみると、数日前まで固^{つぼみ}かった^{ふく}蕾が膨らみ始めているではないか。

そうか、春はすでにこの枝まで来ていたのだ。私は^{まが}紛うことなき春を見つけることが出来た。

この詩は、春（＝理想、尊いもの）は、遠くを探すのではなく、いつも身近にあるという教訓の詩だそうですが、それだけでなく、事物の在り方について私たちに大切なことを教えてくれていると思います。

普通一般に、存在というと、色や形があって、見たり触ったり出来るものを言います。

ところが、「春」というものには色や形はありません。

そうすると「春」は存在しないのかというと、詩の作者は庭先の梅の蕾が膨らみ始めている事実を見て「春が来た」と言っています。

つまり、春には色形はないが、草花のいのちの芽を出させ花を咲かせる大自然の「ハタラキ」として、やって来る、その事実を私たちは、「春が来た」と喜んでいるのです。

そうすると、存在の仕方には次の二通りあるということになります。

色、形があって、見たり触ったりして、確認出来るもの

色、形がなく、見たり触ったり出来ないが「ハタラキ」として存在するもの

そこで仏さまの存在の仕方ですが、仏さまは「ハタラキ」として存在しているのです。

どのような「ハタラキ」かということ、すべての「いのち」を^{おさ}撮め^{せつしゆふしゃ}とって捨てない（撮取不捨）というハタラキです。

その「ハタラキ」は、時間空間無限の広がりを持ったこの世界（全宇宙）のありとあらゆるもの（無量＝アミダ）が、一つにつながる（縁起）ことによって生み出されたものです。

この「ハタラキ」を仏と呼ぶのです。

お釈迦さまは、この世界にはそのような「ハタラキ」が備わっているという真理・法則を発見されたのです。

ニュートンが万有引力の「法則」を発見されたように、お釈迦さまはすべての「いのち」の存在を実現してくれる「法則」を 2500 年も前に発見されたのです。

この真理・法則を「法」と呼びます。

「法」は、教え、真理（真如）、法則という意味ですが、それを人格的に味わう時、「法身（^{ほっしん}仏）」と言い、また私たち浄土真宗では「阿弥陀如来」と名付け、私たちの目覚めを促して下さる「ハタラキ」（^{だいぎょう}大行）として頂いてきたのです。

このように仏さまは「ハタラキ」として存在しているのです。

親鸞聖人は次のようなご和讃を作っておられます。

十方^{みじん}微塵世界の
念仏の衆生をみそなわし
攝取^{せつしゆ}して捨てざれば
阿弥陀となづけたてまつる
—浄土和讃—

意識すれば、広大無辺のこの世界のすべての衆生を^{おさ}摂めとって捨てることがない、そういう攝取不捨^{せつしゆふしや}の「ハタラキ」を阿弥陀と申し上げる、というご和讃です。

つまり、阿弥陀さまは「ハタラキ」として存在していることを示されたものです。

よく、「仏さんがおるんなら見せてくれ。見せてくれたらわしも信じる」という人がいますが、これは物の見方が逆なのです。

仏さまは「ハタラキ」として存在していますから、その「ハタラキ」を、この身に感じるということがまず大事なことです。

そのためには、自分の計^{はか}らいを捨てなければその「ハタラキ」を感じることは出来ません。計^{はか}らいを捨てるとは、「私はこう思う」という自分の了見を捨てるということです。そうして無心にその「ハタラキ」を我が身に頂いていくのです。

「仏法は無我にて候」と蓮如上人が仰られたように、「私はこう思う」などというところに仏法はありません。そんな考え方が^い要らなくなるということが仏法に出遭うということなのです。

そうやって計^{はか}らいを捨てることが出来れば、攝取不捨^{せつしゆふしや}の「ハタラキ」が我が身の上に働いていることにハッキリと気づきます。

この私の「いのち」は無量のいのちの「ハタラキ」によって生かされて生きているんだなあということに目覚めるのです。目覚めれば当然、「ありがたいことだなあ。かたじけないことだなあ」と頭が下がります。その頭の下がったところに仏さまは現われるのです。

それは「私の周りはずべて仏さまばかりだ」という目覚めです。

親鸞聖人は「弥陀如来は報・^{ほう}・^{おう}・^け化、種々の身を現じたもう」と仰っています。
阿弥陀さまはすべての「いのち」を救うために千変万化しながら、ありとあらゆる姿をとっておられるというのです。

あの人もこの人も、否、森羅万象あらゆるものがこの私の「いのち」を生かす仏さまだったと目覚めるのです。
道元禅師は「^{じんじつぼうかいしんじつじんたい}尽十方界真実人体」と仰っています。この宇宙すべてが私の体であると仰っているのです。

まさに「我以外皆我諸仏」です。

しかも、その「ハタラキ」は、冒頭の詩の「春」のように、遠くに探すのではなく、最も身近なところ、（今、ここ、我が身）にはたらいて下さっているのです。

何もかも 我一人の為なりき
今日一日のいのち尊し